

(第3回)

中
2020

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で21ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号	
氏	名
	ふりがな

□ ① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

澤田写真館から少し歩くと、なだらかな坂を登る山手のほうに住宅団地がある。

三十年前はそれこそ新興と謳うたわれていた区画で、モデルルームみたいな建売住宅や小じゃれたマンションが建ち並んでいた。

そんな中のこぢんまりとした集合住宅に、悟の一家は住んでいた。両親と悟の三人家族だ。

二人で同じスイミングスクールに通いはじめたのは小学校二年生の頃だった。幸介は小さい頃から少しアトピー気味だったので、水泳をすると肌が強くなる説を信じた母親に通わされたが、悟のほうの理由は違った。^①

手のひらに水かきがついていると噂うわさされるほど泳ぐのが速かったので、学校の先生などに本格的に水泳を習うことを勧められての入校だった。

ひょうきん者の悟は自由時間にプールの底をサンショウウオのようにぺたぺた這はい回ったり、水底から襲いかかって他の生徒を脅かしたりとふざけてばかりだったので、スクールの先生に「カッパか、お前は！」と怒られて、渾名あだながめつきり「カッパ」になった。先生の気分によりけり「水かき」と呼ばられることもある。

それでもいざ授業が始まると、悟は速い子ばかりの上級コースで、幸介はアトピー組の多くが属する通常コースだ。

いつもカッパで水かきのくせに、ぐいぐい水を掻かいて泳いでいる悟はとてもかっこよかった。仲良しだったが、そういうときはちよつと悟が憎たらしくなる。

僕も悟みたいだったらよかったなあ、と思ったり。

もつとも、飛び込みのときふざけていてプールの底で額を割うったりするのを見ると、すぐにそんな羨うらやましきは

消し飛んで正気に戻るのだが。

② そのときはたまたま憎たらしいの側へ針が振れているタイミングだったのだろう。

二人でスイミングに通うようになって二年ほど経った初夏である。

スクールへの行きがけ、いつも待ち合わせている住宅団地の坂の下に着いたのは、幸介のほうが先だった。

——だからその箱は幸介が先に見つけた。

住宅団地の案内板の下に、ぼつんと段ボールが置いてあった。

③ 箱がみゃーみゃー鳴いている。軽く閉めてある口を、恐る恐る開けると、——産毛だらけの白っぽい毛玉が二つ。ところどころに三毛のぶちがアクセントで入っている。

へ ④ 〽もなく見入った。

何て頼りない、やわやわとした生き物なんだろう。あんまりにも小さくて触るのがためられるような——

「わー、ねこ！」

頭の上から降ってきた声は悟だった。

「どうしたの、これ」

言いつつ幸介の隣にしゃがみ込む。

「ここに置いてあったんだ」

「うわー、かわいいー」

しばらく二人ともふわふわの産毛を遠慮がちに指でなでたりしていたが、やがて悟が言った。

「……持ってみる？」

アトピーだから動物に触っちゃいけません、と昔から口やかましい母親の小言が頭をよぎったが、悟が触るの

なら自分がそれを見ているだけなんて我慢できない。大体、見つけたのは幸介が先なのだ。

下から両手ですくい上げるようにして手のひらに載せる。——なんてかるい！

ずっと触っていたいくらいだったが、スイミングに遅れてしまう。もう行かなきゃ、そろそろ行かなきゃ、いよいよ行かなきゃ、とお互い^⑤後ろ髪を引かれつつ立ち上がる。

帰りがけもう一回様子を見に行こう、とスイミングスクールまでの道のりを転がるように走った。

滑り込みセーフにちよつとこぼれて、先生に二人でこつんと頭を叩かれた。

スイミングが終わって、今度は帰り道を住宅団地の坂の下まで転がるように走った。

案内板の下に箱は変わらずあったが、子猫は一匹になっていた。誰か拾っていったのだろう。

^⑥残った一匹の運命は自分たちが握っているような気がした。額に三毛のぶちが八の字に入った子猫。しつぽは黒カギ。

二人して箱のそばに座り込み、丸くなってすやすや眠っている子猫を穴が空くほど見つめる。——こんなちつぽけでふわふわの生き物を、家に連れて帰りたくない子供なんているだろうか。

もし家に連れて帰ったらどうなるかな、と、お互い頭の中が高速回転しているのが分かった。

うちはどうかな、お母さんはアトピーのことで反対するだろうな、それにお父さんがあんまり動物好きじゃないし……

不安要素が多い幸介に対し、思い切りをつけるのが早かったのは悟である。

「……僕、お母さんに頼んでみる」

「ずるいぞー！」

とっさにそう詰^なってしまったのは、何回か前のスイミングが尾を引いている。幸介が少し気になっていた女の

子が、上級者コースで泳いでいる悟を見てカッコいいねとつばやいたのだ（今にして思えば、「カッパだけど、泳いでいるときだけはカッコいいね」だったので、誉め言葉として羨ましいかどうかは微妙だったのだが）。

悟は泳ぎが速くてアトピーじゃなくて、お父さんもお母さんも優しいから猫だつてきつと飼っていいよと言ってもらえる。

気になるあの子にカッコいいねと言ってももらえるばかりでなく、こんなふわふわでやわやわの生き物をカンタンに手に入れられるなんて、そんな不公平なことがあつていいものか――

ずるいと言われた悟は、^⑦まるで急に引っぱたかれたみたいにおろおろしていた。

その戸惑った顔を見て途端に後ろめたくなる。

単なる八つ当たりだということは自分が一番知っている。

「……だって、僕が先に見つけたのに」

どうにかひねり出した言い訳に、悟はバカ正直に「ごめん」と謝った。

「幸ちゃんが先に見つけたんだから幸ちゃんの猫だよね」

八つ当たりした自分がみっともなく、怒つたみたいに頷くことしかできなかった。^⑧少し気まぐずく別れ、子

猫の段ボールを抱えて家に帰る。

思いがけず、母親はそれほど反対しなかった。

「水泳のおかけかしら、アトピーも最近すっかり出なくなつたし、掃除をまめにしたら大丈夫じゃないかしらね。前におじさんの家に行ったときも猫は平気になつてたし……」

そういえば、最近はまだアトピーのことをうるさく言われなくなつている。病院にも（ A ）行かなくなつた。

強硬な障害物になったのは（ B ）父親だった。

「駄目だ駄目だ、猫なんか！」

最初からこの調子で（ C ）お話にならない。

「家の中で爪でも研がれたらどうするんだ！ 大体、猫を飼うのだってタダじゃないんだぞ！ 俺は猫を食わせるために写真屋をやってるんじゃない！」

母も一緒に頼んでくれたが、それが余計に気に食わなかったらしい。父はますます強情になり、夕飯の前に元の場所へ捨ててこいと家を叩き出された。

べそをかきながら住宅団地の坂の下まで子猫入りの段ボールを抱えて歩いた。

案内板の下に箱を——置くなんてとてもできない。さっき気まずく別れたばかりで気が退けたが、幸介は悟の家へ向かった。

「猫、お父さんが駄目だって……」

出てきた悟に、しゃくり上げながらようやくそれだけ言うと、「分かった」と悟は頷いた。^{うなず}「任せて、僕にいい考えがあるから！」

言うなり奥へ駆け込んでいく。おばさんに猫のことを頼んでくれるのかなど思っただけで待っていると、悟はスイミングに通っているときに使っているスポーツバッグを肩にかけて出てきた。

「悟、そんなものを持ってどこ行くの？ お父さん帰ってきたらすぐごはんよ！」

「先に食べて！」

悟は言いつつ玄関で靴を履いた。

「僕、幸ちゃんとちよつと家出してくるから！」

「はア!？」

いつも上品で優しいおばさんのそんな引っくり返った声は初めて聞いた。

「ちよつと悟、何言ってるのアンタ！」

おばさんは台所でどうやら天ぷらでも揚げている最中だったようで、慌てふためきつつも玄関まで出てこられずに台所から顔だけ出してあたふたしている。

「幸ちゃん、どういうことなの!？」

そんなことは幸介に訊かれたって幸介にもよく分からない。「はア!？」と声を上げたのは幸介も同じだ。

いいから、と悟に手を引つ張られて悟の家を後にする。

「こないだ学校の本で読んだんだ。子犬を拾った男の子が元の場所に捨ててこいってお父さんに怒られるんだけど、どうしても捨てられなくて家出するの。そうしたら夜中にお父さんが捜しにきて、飼うんだったら自分とちゃんと面倒見るんだぞって最後に許してくれるんだ」

悟は少し興奮気味に本のあらすじをまくし立てた。

「幸ちゃんもおんなじだから絶対うまくいくよ！ 子犬が子猫になっただけだし！ 僕も手伝うからさ！」

子犬が子猫になるのはともかく、手伝いが入る時点で本とはだいぶ違っているような気がしたが、家出くらいしたらお父さんも少しはかわいそうに思うかも——と、^④軽くそそのかされた。

それじゃあやってみようかと、まずはコンビニでキャットフードを買った。子猫用の物をレジで尋ねると、髪を赤く染めた若い男の店員が「これなら大丈夫じゃないの」とペースタタイプの猫缶を選んでくれた。見かけは恐そうだが意外といい人だ。

そして住宅団地の中の公園で晩ごはん。悟は家からパンやお菓子を持ち出してきていたので、二人で適当にそ

れをかじる。子猫には猫缶を開けてやった。

「夜中っていうからには、たぶん十二時くらいまで粘らなきゃ駄目だと思うんだ」

悟は抜きなく目覚まし時計を荷物の中に入れてきていた。

「でも、そんな遅くまで帰らなかつたらお父さんにすつごく怒られないかなあ?」

幸介の父親は家の外では愛想がいいが、家の中では癩癩^{かんぞう}持ちで怒りっぽい頑固親父だ。「何言ってるんだよ、猫のためじゃないか! それに最後には許してくれるから大丈夫だよ!」

許してくれるのは本の中のお父さんの話だね? ——というのは悟の^⑩やみくもな熱意に圧倒されて言い出せなかった。……うちのお父さんは、だいぶキヤラが違うと思うんだけど、ホントに大丈夫かなあ。

公園で猫をかまいながら暇を潰^{つぶ}していると、犬の散歩やウォーキングのおばちゃんが一々声をかけてくる。「あら、二人ともこんな遅くまで何してるの。うちの人が心配するわよ」

この界限^{かいはい}では二人とも顔が割れすぎている。場所の選択からしてNGだったんじゃないか、と幸介はうっすら疑惑を覚えていたが、悟は特に問題を感じていないらしい。

「心配しないで、いま家出中だから!」

「あらそう、早く帰りなさいよ」

違う。これは、正しい家出のやり方とは明らかに違う。正しい家出のやり方なんて幸介にもよく分からないが、^⑪とにかくこれが違うということだけは分かる。

五人目のおばちゃんに声をかけられるに至って、ついに幸介は悟の家出作戦に^⑫異議を唱えた。

「悟、たぶん家出のやり方ってこうじゃない」

「え、でも本では公園にお父さんが捜^{さが}しに来るんだけど」

「うん、でもこれじゃたぶん意味ないと思うんだよね」

家出くらいしたらお父さんもかわいそうに思うかも、かわいそうと思って猫を飼うのを許してくれるかも——このままでは絶対にそのエンディングにはたどり着けない。

そこへ「悟」と呼ぶ声があった。見ると悟のお母さんがやってくる。

「もう遅いからいいかげんに帰ってらっしゃい！ 幸ちゃんもおうちの人が心配するわよ！」

そんな、とおの慄いたのは悟である。

「こんなに早く見つかるなんて！」

「見つからないと思ってたんだ!!」

むしろそちらのほうが驚きである。声をかけていったおばちゃんはみんな悟の家に立ち寄って「お宅のお子さんまだ公園で遊んでたわよ」と知らせていたに違いない。

「ごめんお母さん！ まだ僕たちは捕まるわけにはいかないんだ！」

叫んだ悟が「幸ちゃん、行こう！」と子猫の段ボールを抱えて逃げ出した。

(有川浩 「旅猫リポート」)

問一 ――部①「悟のほうの理由は違った」とありますが、その理由の説明としてもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 幸介は水泳が嫌いだったが、悟は水泳が好きで教室に通っていたということ。

イ 幸介は無理に通わされていたが、悟は周囲から期待されて通っているということ。

ウ 幸介は目立つ存在ではなかったが、悟は人気者でいつも周囲を明るくしていたということ。

エ 幸介の家は水泳教室まで遠かったが、悟の家は近く気軽に通うことができたということ。

問二 ――部②「そのとき」とはどんなときですか。説明としてもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 悟がかっこよく泳いでいるとき。

イ 悟が幸介との待ち合わせにやってきたとき。

ウ 幸介が捨てられていた猫を発見したとき。

エ 悟が猫を飼えるかどうか聞こうといったとき。

問三 ――部③「箱がみゃーみゃー鳴いている」とありますが、この表現に使われている表現技法と同じ技法が使われている文章を次から選び記号で答えなさい。

ア 掃除機が走り回る。

イ 人間は考える葦である。

ウ ヒーローのように登場する。

エ チャンスだ、今が。

問四 空らん部へ④∨にあてはまる語としてもつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

ア 声 イ 色 ウ 心 エ 夢

問五 ――部⑤「後ろ髪を引かれつつ」⑫「異議を唱える」の本文中の意味としてもつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

⑤ 後ろ髪を引かれる

ア 無理やり動きを止められる。

イ 心が残って去りがたい。

ウ 強い風にあおられる。

エ 相手に嫌がらせをする。

⑫ 異議を唱える

- ア 違った方法を伝える。
- イ 不安な状態を伝える。
- ウ 不賛成の気持ちを伝える。
- エ 優れていない状況を伝える。

問六 — 部⑥ 「残った一匹の運命は自分たちが握っているような気がした」とありますが、この時の幸介の気

持ちの説明としてもつともふわさしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 二匹まとめと一緒に飼ってもらおうよう頼むことができるのは、幸介と悟しかいがないという気持ち。
- イ 猫を捨てた人間を探し当てて、説得し、返すことができるのは、幸介と悟しかいがないという気持ち。
- ウ 今すぐ、猫にふさわしいえさを与え体力をつけさせられるのは、幸介と悟しかいがないという気持ち。
- エ 一匹だけ置き去りにされた猫の命を守ることができるのは、幸介と悟しかいがないという気持ち。

問七 — 部⑦ 「まるで急にひっぱたかれたみたいにおろおろしていた」とありますが、それはなぜですか。もつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 日頃は優しい幸介が、突然暴力的な言い方をしたことに、悟が驚きを隠せなかったため。
- イ 悟は、幸介の言葉を全く予期しておらず、むしろほめてくれると思っていたため。
- ウ 悟の家族が猫を受け入れる可能性は高いと思っていたが、悟が急に心配になったため。
- エ 幸介の意気込みの強さに、一緒に見つけたはずだった悟はよそよそしさを感じたため。

問八 — 部⑧ 「少し気まずく別れ、子猫の段ボールを抱えて家に帰る」とありますが、なぜ気まずかったのか、幸介の気持ちとしてもつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 悟に子猫がなつくのがわかっており、悔しさを隠しきれなかったから。
- イ 幸介が先に見つけていても子猫を持ち帰る理由にはならないことをわかっていたから。
- ウ 悟ばかりよい思いをしていることに対し、やっと仕返しができたから。
- エ 幸介のアトピーが悪化する可能性があるのに、子猫を持ち帰ってしまったから。

問九 空らん（A）（B）（C）にあてはまる適切な語の組み合わせを次の中から選び記号で答えなさい。

- ア A まるで B さながら C せめて
イ A むしろ B おのづから C めっきり
ウ A めっきり B むしろ C まったく
エ A せめて B さすが C およそ

問十 — 部⑨「軽くそそのかされた」とあるが、それはどのようなことか。解答欄にあわせ、二十五字以内で答えなさい。

問十一 — 部⑩「やみくもな熱意」とありますが、その説明としてもっともふさわしいものを選び記号で答えなさい。

- ア 心に迷いが生じ分別がつかないが、このままやり通すしかないという気持ち。
イ この先うまくやり通せると思いきみ、必ず成功すると信じている気持ち。
ウ 状況の悪さはわかっているが、なんとかなるだろうと気楽に考えている気持ち。
エ 複雑な状況でどうしたらいいかわからないが、直感で決めるしかないという気持ち。

問十二 ――部⑩――とにかくこれが違うということだけは分かる」とあるが、その説明としてもっともふさわしいものを選び記号で答えなさい。

ア 家出はひそかに行うもので、知り合いに会うような、自分たちが遊んでいる場所においても家出とは言えないということ。

イ 悟の家出の装備では、一晚過ごすことはできず、結局家に帰るしかないのだから、家出とは言えないということ。

ウ 悟が読んだ本に書かれた家出は主人公ひとりで行っているため、悟と幸介の二人で行うことが家出とは言えないということ。

エ 幸介は家出をしていると思うているが、母親に家出を伝え探してもらいたいと考えているのは家出とは言えないということ。

問十三 この物語を読み、四人の小学生が感想を述べあっています。作品の感想として適切ではない生徒を選び記号で答えなさい。

生徒A 幸介は自分が子猫を飼うと言い張って連れ帰ったのに、お父さんに反対されて飼えなくてかわいそうだったね。

生徒B 子猫の命を助けるために、悟も幸介も大人に反抗する勇氣を持つことができたんだね。家出してまで子猫を飼おうとするのは大きな決心だったと思うな。

生徒C

悟は、子猫を飼うために家出を思いついて実行するなんて、子猫のことをまず一番に考えて動いているね。

生徒D

悟の明るくて真っ直ぐな性格が回りのひとを突き動かしていくけれど、側にいたら自分は振り回されて少し大変かもしれないなあ。

二 次の詩をよく読んで後の問いに答えなさい。

人間ピラミッド

北原宗積

気がつく

① 父を 母を ふんできた

父と母も それぞれ

祖父を 祖母を ふんできた

祖父母も また

そのふた親をふみ

むかしからのひとびとをふみ

いのちの過去から未来へと

時のながれにきずかれていく……

人間ピラミッド

そびえたつ そのいただきに

ぼくは 立ち

まだいない 子に 孫に

(X)のいのちに ふまれていた

問一 この詩の形式としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 文語定型詩

イ 文語自由詩

ウ 口語定型詩

エ 口語自由詩

問二 第四連で用いられている用法としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 擬態語（物事の状態・身ぶりを言葉で表した語）

イ 対句（対立する言葉や表現を並べる技法）

ウ 体言止め（文の終わりを体言でおわらせる技法）

エ 倒置法（言葉の順序を変えて表現する技法）

問三 ――線部①「父を 母を ふんでいた」とあるが、具体的にどのようなことか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父母ふたりがいることを意識せず自分が大きくなってしまったということ。

イ 父母ふたりの存在を踏みつけて自分が成長していくということ。

ウ 父母ふたり以上に高い地位を自分が手に入れるということ。

エ 父母ふたりのいのちをふまえて今の自分があるということ。

問四 空らん（X）に入る言葉を本文から二字でぬき出しなさい。

問五 この詩について生徒A～Dが感想を述べ合いました。明らかに間違った感想を述べている生徒を記号で答えなさい。

生徒A 「私たちはみんな、いのちによってつながっている人間ピラミッドの頂上に立っているということだね。」

生徒B 「いのちが延々と繰り返されて、ずっと昔の人のいのちから今に連なっていることがうまく表現されているわ。」

生徒C 「人間ピラミッドのどこに属するかはそれぞれで違うし、そのピラミッドを子どもだけで作り上げるこの大変さが伝わってくるよ。」

生徒 D

「自分だけのいのちではなくて、父、母、祖父、祖母、そして、もつともつと昔の人々のいのちのつながりが感じ取れるな。」

三 次の問いについてそれぞれ答えなさい。

- A ひさかたの光のどけき (①) の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則
- B 月みればちぢにもこのそ悲しけれわが身一つの (②) にはあらねど 大江千里
- C 見てをれば心たのしき炭火かな 日野草城
- D 万緑の中や吾子(あこ)の齒生え初せむる 中村草田男

問一 空らん (A)・(B) にはそれぞれ季節が入るが、次の組み合わせの中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア ①春―②冬 イ ①春―②秋 ウ ①秋―②夏 エ ①夏―②冬

問二 CとDの季語を抜き出し、その季節も答えなさい。

問三 CやDのように季語が必要なものはどれか、次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- A 短歌 B 俳句 C 川柳

四 次の（ ）にあてはまる動物を答えなさい。(ひらがなでも可)

① () も木から落ちる…その道に長じた人も時に失敗すること。

② 取らぬ () の皮算用…まだ手に入るかどうかわからないものを、手に入れたつもりで期待をかけて計画すること。

③ 能ある () は爪をかくす…実力のある者ほど、人前でやたらにそれを表そうとしない。

五 次の文法問題に答えなさい。

問一 次の文の主語と述語を一文節で答えなさい。ただし、ない場合は、×と答えなさい。

① 今年開催される東京オリンピックが楽しみだ。

② 彼こそ、次のワールドカップの代表キャプテンにふさわしい。

問二 次の先生と生徒のやりとりで、文法的に間違っている表現を次からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 先生「明日はいよいよ大会当日です。試合に保護者の方はいらつしやいますか。」

イ 生徒「はい、母は来ると申していて、父は来れないとおっしゃっていました。」

ウ 先生「お母さんはいらしてくださいさるのですね。明日の試合は、後悔がないように全力でがんばりましょ

う。」

エ 生徒「先生やコーチから教えていただいたことを忘れず、チーム一丸となって、試合に臨みます。」

六 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ①ゼツタイ絶命の危機だったが、なんとか乗り越えられた。
- ②君が立っているのはちようどキョウカイ線だ。
- ③いつか飛行機のソウジユウをしたい。
- ④僕は生徒会長にリッコウホした。
- ⑤大阪へは新幹線でオウフクした。

七 次の——線部の漢字の読みを書きなさい。

- ①湖面に映る美しい景色に魅了された。
- ②彼女は雑務を一つひとつこなしていた。
- ③教室の掃除を率先しておこなう。
- ④眼下に海が広がっている。
- ⑤世の中の風潮に流されてはいけない。

